

生徒の実態

脳性麻痺、車椅子移動が基本、四つ這いや歩行器を使用している。未熟児網膜症でかろうじて光を感じている。感覚に過敏があり散髪、心電図等の診察、慣れない感触や初めて触るもの、初めてのことにに対して対応できないことがある。見通しがもてる活動、繰り返しの同じ流れの活動では穏やかに過ごすことができる。物を落として、その音を楽しむことが大好きであるため、落としてはいけない物も落とすことがある。

対応力を伸ばす目的

予定変更や気持ちに沿わないことが起こっても、怒ったり泣いたりせず気持ちを切り変えて学習活動に取り組めることは、卒業後、穏やかな気持ちで社会生活を送るうえでも重要な目的である。

手立て

発達段階に合った教材を活用し、人とのやり取りに応じる活動を授業や日々のやり取りの中に設定することで対応力を育む。安心して学習できるように、カウントダウンや「はじめ」と「終わり」が分かりやすい教材で見通しをもつ配慮を行った。本人がいつも使っている身近な物や気に入っている物を教材として使用する。(下写真は一部)



1個ずつ教員が底を上か下ランダムに提示し、生徒がそれに合わせてコップを重ねる。

蓋を開け、指定した手でマジックを取り出す。

コンタクトレンズケースとアルミを2つの箱に分別箱の中に入れたタオルとピン球を触り分ける弁別

生徒の変容

耳鼻科、歯科などの診察、散髪はほぼ受け入れられるようになり、エレベーターの順番も怒らないで待てるようになった。車イスのテーブルがいつもついていてに強くこだわりがあったが、なくても過ごせる時間が増えた。トイレでの排泄もできるようになりつつあり、褒められるととても嬉しそうにしている。人とのやり取りに応じることができて、いつもと違って怒らないで笑顔で過ごすことができるようになった。



フードカッターやミシンのスイッチをカウントした分だけ押し続けることができる。

机の上に置かれた物は必ず落とされていたが、どこまで運ぶのか終わりを明確に伝えると落とさないで運ぶことができるようになった。

例：買い物時の商品、掃除のゴミ袋、使った食器を落とさず持っていくことができる。



帽子、防災ヘルメット、体育のビブスなど追加で何かを着る行為はとて嫌がるが多かった。体の一部に当てているだけでもOKというところからはじめて、調理エプロン、レインコートを、自主的に着用しようとする姿が見られるまでになった。